

# 火星



平成18年 3月号

# 七曜抄 (三)

山尾玉藻

奈良漬の蔵の空なる風

海鼠腸に金粉振つてありにけり

マツサージ師冬菜畑を来しと言ふ

鮫鰯の置き直されし鮫鰯かな

粕汁をすすするには夜の更け過ぎて  
雪暗や達磨びつしり並べ売り  
さきほどの鳥打帽が梅の陰  
日銀も牡蠣船も春灯しをり  
朧より蟹の湧きつぐ寺縁起  
てんの寺の亀の脛につちふれる

# 平成十七年度火星賞作品自選二十句

戸 栗 末 廣

さつきまで空にありたる木守柿

猪罨やまつすぐ走る山の水

幼な子といちまいづつの落葉焚

梟のはらわたの色朱とおもふ

麦踏みするときどき影を正したる

大根の首痒さうに育ちけり

みそさざい回覧板が濡れてゐる

いかなごを買ふ列にゐてさびしかり

昔を、今を懐かしく

なぜ俳句と言う言葉の響きが私に心地よいのだろう。なぜ三十年も熱中してきたゴルフや麻雀を遠ざけて俳句に没頭するのだろう。なぜ苦しみながら俳句を続けるのだろう、受験、就職、結婚、仕事、退職と人生の折々に励ましてきてくれた一句を、また引き出すしかない。

雪野原すずめが一つ黒くとぶ

すえひろ

小学校四年の冬休みの宿題の一句。

この句について担任教師は授業で「この雀はお母さんを失くした末廣君自身ですか」と質問された。後年、

遠山の雪をよごしぬ白木蓮  
縄の玉ほどきてをれば春の雲  
傘さして父の来てゐる椿かな  
ぶらんこのすぐに飽きたる子守かな  
旅終へて山のやうなる春炬燵  
空いまだ昼のいろなり山椿  
囀りやもも色なりし母の骨  
亡骸に冷房すこし落としけり  
空に出て金蠅美しき麦の秋  
まつさきに蜘蛛の巣に来る秋の風  
流灯のうしろに渦の生まれたる  
瓢箪に芯といふものありさうな

私は質問の意味を理解した。

勉強嫌いの私が唯一、先生に褒められたことと相俟ってこの句が私を支えてきてくれた。

私の俳句の原点は単純ながら、ここにあると思う。

仕事に区切りがついた時、一瞬にして、その原点に戻ったようだ。自ら、不思議だ。

少年期まで見馴れた四方の富士山、南アルプス、八ヶ岳の景色を今も胸中に宿し詩因の糧としている。俳句は歩んできた道を、そして今の時を懐かしく詠ってゆきたい。

受賞にあたり山尾主宰より過分なお言葉を頂きました。

そして加藤かな文様から寄せられた素晴らしい「作家論」は何度も何度も拝読しました。

両先生ありがとうございました。

主宰と岡本高明先生に学ぶことを誇りにこれからも俳句を楽しんで行きたいと思います。

最後に会員の皆様、昔屋句会の皆様に厚くお礼申し上げます。

# 太白星

柳生千枝子

八十をいくつ過ぎたる初夢か  
一月といふ真つ白な月出づる  
年賀客見送る真珠いろの月  
松の内てふ清浄の夜となりぬ  
かるた会の熱未だ覚めぬ手をつなぐ  
一月の今が倅せ屠蘇の酔  
父母思ふ松の内てふ夜の美しき

杉浦典子

小さき木に小さき雪吊仕上がりぬ  
梹や柩の部屋に灯のあふれ

初雪の街に泊まりし忌日かな  
雪の立山見ゆる座をすすめらる  
生姜湯や閻魔のはなしききながら  
河豚提灯新幹線に乗りきたる  
冬の川渡りはるかへ来るかな

浜口高子

うらわかき声に自然薯洗はるる  
生蛸を丸ごと料る霜の夜  
綿虫や雷封じの池平ら  
最澄の山懐に葱にほふ  
まづ卵かけご飯なり枯木宿  
薄氷にあんぱんの胡麻こぼれたり  
十二月脛に国旗はためける

# 火星作品

## 山尾玉藻選

夕べより重たくなりし熟柿かな  
大和郡山 城 孝子

ハイヤーで山へ入りけり十二月

霜晴の草の根つよき父の墓

空也寺に女等のこゑ十二月

煤逃げの煤逃げ連れて戻り来し

かまくらや影といふものうつくしき  
明石 戸栗末廣

竹やぶの雪に踏み入り十二月

うなぎやの階段暗し三の酉

みそさざい水琴窟にちよくちよく来

ひとところ風に押さるる冬の川

御馳走は柚子百珍とのたまへり  
神戸 深澤 鱧

鯉揚げし泥に水脈あり十二月

だぼだぼと小魚量る焚火かな



白々と南京黄櫨の十二月  
城崎は雪見障子を洗ひをり  
冬川のゆくへ大阪烟りをり  
押しくらまんどゆう通用門に鍵かけて  
牡蠣舟に砂利船の波及びけり  
牡蠣舟へ大きな背中下りゆけり  
形代がポケットにあり年の暮  
消防車洗はれてゐる小春かな  
奥琵琶の浦の戸ごとの懸大根  
雨雫の賑はうてゐる枯木径  
雪霏々とムンクが口を開けてをり  
革椅子を鳴かせ目覚むる年の夜  
海鼠割く男の手なり滴れる  
枯野遠く鍋より掬ふ白子かな  
ポインセチア頭あづける柱欲し  
鞆よりはみだすりボン聖夜なる  
セーターもマフラーも赤海を見る

八幡 大山文子

宝塚 山田美恵子

伊丹 渡邊美保

# 選のあとに

山尾 玉藻

切な表現である。「雪霏々と」との情景も良く、秀句である。

夕べより重たくなりし熟柿かな

城 孝子

最初は枝に生っている熟柿の写生と思った。しかし、「夕べ」を生かすには卓の上などに置かれている熟柿の方が良い。灯の下の熟柿に赤さが増して、より濃く見えてきた感じを、作者は「重たくなりし」と捉えたのである。心象の写生である。

かまぐらや影といふものうつくしき

戸栗 末廣

中七は、へ帚木に影といふものありにけり 虚子をうまく利用して別の一句に仕立て上げている。掲句もやはり昼間の影ではなく灯影である。かまぐらの中には小さな男女の子供がおり、七輪には餅がのっている。他は一切何も無いのである。その影は懐かしく、美しい。

雪霏々とムンクが口を開けてをり

山田美恵子

普通、絵の中の景を取り入れて一句にすると、実景よりインパクトに欠ける場合が多い。しかし掲句はその実景さえも遙かに越えている。「ムンクが口を開けてをり」はムンクが描いた絵であり、実際には正しくないが、作句上では最も適

竹馬にちよつと乗りたる庭掃除

坂口夫佐子

子供が遊んでいた竹馬に「ちよつと乗りたる」でも構わないが、それよりも子供はそこには居ず、竹馬だけが置いてあつた方が良い。こちらの方が、より恥らいが見えるのである。周りを見まわし誰も居ないことを確かめ、乗ってみたのである。下五「庭掃除」も適っており、ちよつとした秀品である。

行きずりに手つなぐことを冬菜畑

丸山 照子

史跡などを巡る時、坂道などで道路状態の悪い所がある。そう言う所を想像すれば良い。作者は同行した老人に手を貸してあげたのである。中七「手つなぐことを」に俳味がある。

一湾に鮫鱈の口吊り残る

上嶋 初代

景としての構成に優れた句である。吊るし切りされた鮫鱈の口、即ち輪の状態になった顎だけが残っているのである。それを点とした「一湾に」は一句が広がってゆき、雄大である。また、鮫鱈と言えばその海の荒れが見えてくるのも良い。

筆談の単語ののこる冬座敷

安藤 道子

元々耳や口が不自由な方ではなく、「筆談」から想像する

と舌癌か口頭癌により声を失われた方のような。掲句はその方が作者の家を訪れ、帰られた後の景である。「単語ののこる」が簡潔で素晴らしい。客観的事実の写生句の形であるが故に、読者はむしろ、より凄まじい寂しさを感じるのである。秀句。

点滴の並びて歌ふクリスマス 増田なおこ

昔、点滴を吊るしたまま歩いている人を初めて見た時は実に驚いた。その上今や、「並びて歌う」である。ブラックユーモアの俳味あり。

十二月日のある処腰下ろす 加藤 君子

「日のある処腰下ろす」は稚拙そうだが、簡潔で解かり易い。世間では多忙な「十二月」と言えど、今の作者には殆ど関りが無い。自分自身の面倒だけを見れば良いのである。九十と言う齡が自ずと表れた秀品である。

荃石の姑から継ぎし寒さあり 戸田 春月

この句の「寒さ」はいわゆる嫁姑からくる寒さではない。〈蟾蜍長子家去る由もなし 草田男〉のあれである。現代の若い女性のように、奔放に生きることが許されなかった時代に育った作者故の宿命が「寒さあり」なのである。

鮫鱈のいと愛らしき腹の穴 深澤 鱻

こちらは鮫鱈そのものを凝視した句である。「いと愛らしき腹の穴」は作者の発見による感動の素直な言葉である。鱈のある体の張った魚と違い、こちらはたぶたぶの腹である。まるでその穴は臍のようでもある。

風邪ひかず転びもせず年果 中上 照代

大年の湯に膝さすり腕さすり 同

ひきつれる足をなだめて年の暮 同

一句一句はやや淡い感じもするが、三句こうして並ぶと本物の強さを感じられる。大病を患われた後、三年ほど経つのであろうか、生死に関する病を患った者だけが知る真実がある。生きていることへの有り難さがしみじみと伝わってくる。

闇汁会めがね掛けたり外したり 西畑 敦子

「闇汁会」で「めがね掛けたり外したり」は一見読者を馬鹿にしたような句に見える。が、眼鏡を掛けることが常態である人にとって、闇の中でも掛けている方が落ちつくのである。この行為は眼鏡の曇りに因るものではなく、闇を覗く仕草ととった方が良い。

# 恒星圈

木野本加寿江

大東由美子

音あらく雨戸繰りをり冬銀河  
くせとなる朝のコーヒー笛鳴けり  
溜池の半分だけの初氷  
ゆつくりと一人の朝餉とろろ汁  
炒りたての胡麻の香りの冬菜なり

ルミナリエ闇に赤子の声のして  
冬落暉棒振りかざす遊びして  
温室の底へ底へと真昼なる  
鉄棒の着地ふはりと雪の花  
数へ日のもういいかいにまあだだよ

小池 楨女

高尾 豊子

バス停は法隆寺前冬雀  
冬の鳶呼び合うて立つ佐保の川  
双塔の影うかびたる冬麗  
逃げゆくはいつもの塔や冬雀  
塔影の舗道を過る孕み鹿

店番の臯客に知らん振り  
薄紅葉吹かれて池の形変へし  
神主に妻をりにけり冬桜  
福耳の干支の犬ゐる冬の空  
吉凶は気にせぬふりの皮衣

# 獅子座

山尾玉藻推薦

中上照代

風邪ひかず転びもせず  
に年の果大年の湯に膝さすり腕さすり  
ひきつれる足をなだめて年の暮  
大福茶在はさぬ人の話など

西畑敦子

霰玉浴びて婚の荷発ちにけり  
娘の作る聖菓夫にも供へけり  
闇汁会めがね掛けたり外したり  
四角なる御堂の庭の冬花火

河崎尚子

鈍色の海せりのぼる冬の虹  
冬鳥の観察隊の散らばりぬ  
夫の国へ帰り行く子や初時雨  
片方の頬の冷たし葱畑

城尾たか子

冬枯に脇勸請の鎮もれり  
凍雲に身を翻す宮の鯉  
枯を来てワインを空ける五人かな  
室花や早めに祝ふ誕生日

松井倫子

雑炊の飯粒透くや戸の開きて  
猪宿の玻璃に口紅引きにけり  
踏み行ける落葉の下の謎めいて  
抜け道の多き祇園や年の市

南浦輝子

客席に落葉の積もる競技場  
何も無き畑に銀杏落葉かな  
冬ぬくし顔を向けたる寺の猫  
真夜中の柚湯の柚子の離れゆく

小林成子

冬至湯や父の年忌を数へぬる  
水鳥のかはしてゆける竿の先  
冬の日のふと入りたる真珠店  
鳥賊の脇をボールに入る雪の朝